

【国で一番人気の誰にでも優しい好青年冒険者（元副騎士団長）に恋する根暗のぼちやぼちや魔女が、何とか処女を貰ってもらおうと「好きな人に見える」薬を使ったら、激甘ラブラブエッチされて、嬉しくも切なくなっちゃう話】

「ねえねえ、イオルグ♡ちよっと一緒にお出かけしない？イオルグが好きそうなお酒を出すお店を見つけたの♡」

「あ！何を勝手にイオルグを連れて行こうとしている!?そやつは私の契約者だ！つまり私のものだぞ！」

「イオルグ…。その手合わせをお願いできないか？そ、そ、その後は一緒に食事でもどうだい？い、いつもお世話になっている礼をしたいんだ…」

「…」

赤髪褐色巨乳のお色気担当シーフ、銀髪青目、ツルペタ強気のドラゴン人外娘、黒髪ピンク目のスレンダー魔法騎士。もれなくとんでもない顔面偏差値の女3人に囲まれているのは、清潔感のある茶色の短髪にいつも優しげな光を湛える緑の瞳、がっちり鍛えられた分厚い体に、決して低くない彼女たちをかなり上から見下ろす程の長身。そして人好きしそうな笑顔を浮かべた精悍な顔つき。

「はは。じゃあみんなでご飯食べに行こうな」

優しく笑って、癖のある女3人の頭を平等に優しく撫でる人の良さ。

「もう！イオルグはいつもそうなんだから！」

「我だけを見てくれればいいものを！」

「：しょうがないからお前たちが付いて来るのを許可してやる」

そう言っって3人の女たちは、それぞれにイオルグに引っ付き、宿の部屋を出

て行こうとする。

「ナリアも行くだろ？」

イオルグは部屋の隅で、黒い薄汚れたローブを被って、何やらブツブツと呟きながら本を読んでいる人物にも声を掛けた。

「わ、私は行きません」

「なんで？この街に来るの初めてだろ？一緒に美味しいご飯食べよう」

イオルグが女3人からスルリと離れ、床に座る女のローブを脱がそうとうする。

「さ、触らないで！」

「…ごめん」

女の鋭い声音に、イオルグは申し訳なさそうに眉を下げる。

「イオルグ！そんな陰気な魔法使い、放つときなさい！」

「そうだ！戦闘の時に役立ってくれればいいだけだからな！」

「私たち4人のパーティー仲間と違って、そいつはあくまで今回のクエストのみの雇われ魔法使いだ。慣れ合うつもりはないんだろう。ほら、行くぞ」

「何か食べたいもの、あるか？良かったら買ってくるぞ？」

「い、いりません！放つといってください！」

「…分かった。じゃあまた後で」

イオルグと女3人は連れ立って部屋を出て行った。足音が遠くなり、とうとう聞こえなくなった頃、「はぁ~~~~！」と大きなため息を吐いて、女がローブを脱ぐ。

「…あんな、女を侍らせて…！」

女は自分の荷物が入った革袋をこそこそと漁り、中からぬいぐるみを取り出す。それはイオルグに良く似ていた。

若くで帝国騎士団の副団長まで上り詰めたが「もっと国民が気軽に助けを求められるような仕事をしたい』って言って冒険者になり、たくさんの依頼をこなすイオルグ。帝国中が今や、イオルグの活躍に夢中だった。

「みんな、イオルグが好き…でも、私は…私はっ！」

女の手がぎゅううつとぬいぐるみに食い込んでいく。

「もっと好き〜〜〜〜〜！」

そしてそれにズリズリ♡と頬ずりし始める。

「ううう、カッコいい。カッコよすぎる！支援魔法、あんまり人気ないけど頑張ってきて良かった！まさか、クエストの臨時パーティーとして雇ってもらえるなんて！」

ローブの魔法使い、ナリアは王都で大人気のお土産「イオルグ君人形」をぎゅうぎゅうと抱きしめ、キスしまくりながら、きやあきやあ♡と床を転がりま

わる。

「茶色の髪も緑の目もバランスよくついた筋肉も高い身長も、強いところも素敵~~~~~！大好き~~~~♡」

イオルグ君人形に熱い思いを告白したナリアは、はあはあと息を整えながら立ち上がる。

「わ、私みたいに支援魔法しか使えない暗くて可愛くないおデブ女なんて、これからも絶対男の人と付き合ったり結婚したりできる訳ないんだから！なんとか！この機会に！」

ナリアは天に拳を突き上げる。

「イオルグに処女を貰ってもらうんだ~~~~！」

魔法学校でも、引っ込み思案な性格と何かに夢中になるとブツブツと呟きながら集中してしまう気味の悪い癖で一人も友達ができなかったナリアは、色々間違った方向に突き進む女になっていた。

「はい、いらっしやい！」

「あ、あの…ニンフの粉を一瓶いただきたいんですが…」

「はいよー。にしてもあんた見かけない顔だね。冒険者かい？」

「あ、あるんですか!？」

「数は少ないから少し高いけどあるよ！今準備するから。つと冒険者といえど！今あのイオルグがこの街に来てるんだよ！私もさっき見かけたけど、やつぱりかっこいいねえ！綺麗な女が回りを囲って、とても話し掛けられるような雰囲気じゃなかったけどさあ！やつぱりああいう色男はああいう美人を選ぶ

んだよねえ」

「…」

ナリアはごそごと鞆から金を取り出して、カウンターに乗せる。その拍子に、一緒に鞆からイオルグ君人形が零れ出てしまった。

「あ！」

「お！なんだ、あんたもイオルグのファンなんだね！あはは、でもあんたみたいに素朴な顔立ちじゃ、ちょーっと誘惑するのは無理かもねえ」

「…分かってます」

ナリアが俯いてしまったのを見て、店主の女性は「そうだ！」と目を輝かせる。

「ちょっと待ったときな！」

「え…あの…」

店主がカウンターの後ろにある引き出しをこそごとと漁り出し「あった！」と大きな声を出す。

「失礼なことと言って悪かったね。お詫びに良かったらこれ、貰ってくれないかい？」

「こ、これ！」

ナリアが目を輝かせて店主から受け取ったのは、イオルグ君人形用の洋服だった。

「これ！イオルグが騎士団にいた時の副団長専用制服！帽子付き！こ、これ王都ではプレミアがついて手に入らなくて！」

「あはは！田舎の方が手に入りやすかったりするんだよ。娘がちよっただけ人形にハマったんだけど、もう飽きちゃって見向きもしないんだ。良かったら持って行って」

「あ、ありがとうございます！」

太い眉にまん丸な紫の瞳と長い黒髪。そして真っ白でムチムチな質感の体が少しだけ開いたローブの襟元から覗き見える。

「う、嬉しい！ずっと欲しくて！あ、あの！こ、これ、お礼に！」

「わあ……」

嬉しくて舞い上がったナリアが、鞆から綺麗な石を取り出し、店主に渡す。ナリアのふくふくとした手の気持ちいい感触に、店主は思わず変な声を出してしまった。

「こ、これ！お店に置いておけば、邪な気持ちで店に入って来た人だけ、ちょっとだけ気分が悪くなるようになってますから！」

「すごく……助かるよ」

「い、いえ！私こそありがとうございます！私、冒険者なので、またこの街に

来る時は寄ってもいいですか？」

「もちろん。気を付けな」

「はい！」

ブンブンと手を振って去っていくナリアを見て、店主は「…なんかすごく可愛くないか、あの子」と微笑んだ。

「えへ…えへへへ！」

まだ誰も帰ってきていない部屋で、ナリアはイオルグ君人形の洋服を先ほど貰った制服に着せ替えていた。

「うわあ♡似合うよ、イオルグ！すっごくカッコイイ！世界一カッコいいよ♡
白い制服、イオルグのカッコいい顔を際立たせてるね！えっと、帽子も…ほら！
すっごくカッコイイし、可愛いよ♡」

ナリアはイオルグ君人形にニコニコと笑い掛けながら、デレデレの甘い声で話し続ける。

「えへ：イオルグは：どんな女の子が好き：？色っぽい人？それとも可愛い人？それとも、強い人：？えへへ、暗いぽちゃぽちゃの魔法使いなんて：好きになつてもらえないよねえ？あははは！」

ナリアがイオルグ君人形をぎゅうつとその大きな胸に押し付けて抱きしめる。「大好き、イオルグ。ずっと：ずっと好きだったの。だから、だから：一度だけ：ごめんね」

ナリアが鞆から先ほど買ったニンプの粉を取り出し、ぶつぶつと呟いて魔法をかける。すると、それが七色に光った後、白い粉へと変わった。

「よし、成功した：。これを：飲ませれば、私のこと、好きな人って思いこむようになるし、次の日には夢だっと思ってくれる。ふふふ、3年研究した甲斐

があつた！」

大事な粉を、小瓶に入れたナリアは、ふふふと不敵な笑いを浮かべる自分をじーっと見つめてくるイオルグ君人形の目を手で覆った。

「悪い顔してるから見ないで！……ただ、一回エッチするだけだから……。許してね、ごめん」

イオルグ君人形だけが、ナリアの申し訳なさそうな声を聞いていた。

「ただいま、ナリア」

「……」

「まさか、ずっと魔術書を読んでいたの？」

イオルグ達が行った時と同じ場所で本を読んでいたナリアを見て、シーフが顔を顰める。ナリアはその言葉を無視して、ペラリとページをめくった。

（私みたいな暗い女が懐いてきたらイオルグも困るだろうし！一晩だけ時間をもらったら、後はその思い出を大事に生きるんだから！）

そんなことを考えていると、イオルグがナリアの前にしゃがみ込み、紙袋を差し出してくる。

「これ、今日行ったお店で作ってもらったんだ。お肉がたくさん挟んであって、ソースも美味しかったからパンに挟んでもらったんだ。ナリア、ご飯食べてないだろ？」

「…お腹空いてないから」

「じゃあ俺と半分こする？」

「っ！」

にっこりと笑ったイオルグがナリアの隣に座り込む。

「イオルグ、そんな子いいから一緒に風呂に入りに行かない？有名な温泉が

あるの♡」

「こら！お前はいつもいつも！我と入るぞ！」

「なら私も行こう。イオルグ：一緒に行かないのか？」

「俺はちよつと疲れたから休憩しとくよ。3人で行ってきな」

「…」

本当はイオルグと一緒に残りたいが、この部屋の風呂は狭く、自分が入っている間にほかの2人がイオルグにアプローチするのが嫌な3人は、利害の一致で温泉へと出かけることにした。

「…まあ、ナリアは魔術にしか興味ないし、大丈夫よね」

そう言っ出て行く3人をイオルグは手を振って見送った。

「ナリア、一緒に食べよう？」

「…はい」

半分に割ったパンの片方をイオルグがナリアに渡す。それを受け取ったナリアがローブを被ったまま、食べようとした。

「ローブが汚れちゃうよ、ナリア」

「…」

ナリアが恐る恐るローブを脱ぎ、チラリとイオルグに視線を向ける。イオルグはいつも通り優しい笑みを浮かべている。

「食べよっか」

コクリと頷いて、ナリアがもぐもぐとパンを食べる。

「美味しい…」

「はは、なら良かった。ナリアは一人が好きなんだろうけど、俺はナリアと一緒に過ごすの、静かで好きなんだ」

「っ…!!」

イオルグの好きという言葉に愚かにも反応してしまったナリアの顔が赤くなる。ナリアは俯きながら、ガツガツとパンを勢いよく齧る。

「ナリア、そんなに一気に食べたら詰まらせるぞ。ほら、これを飲め」
イオルグが笑顔でお茶を差し出してくれる。

——優しい笑み、優しい声。

勘違いしそうになるけれど、これは「庇護すべき国民」なら誰にでも向けられるものだ。自分だけではない。

ナリアは唇を噛みしめた。

「…」

深夜、ナリアはむくりと体を起こし、周囲のベッドを見る。こんもりと盛り上がったベッドは規則的に上下していて、女たちの小さな寝息も聞こえてくる。

「寝てる…よね」

ナリアは静かにベッドから抜け出すと、足音を立てないようにイオルグが寝る隣の部屋の扉に向かった。

ナリアは、寝る前に疲労回復にいいと言って、イオルグにはニンフの粉で作った魔法薬、そして女たちは強力な睡眠薬が入った飲み物を差し出した。もともと、飲み物に支援効果のある薬を入れて飲ませたことが数回あったので、4人とも何も疑わずにそれを飲んでくれた。

ナリアが小さく扉をノックするが、返事がない。ゆっくりとドアノブを回してみると、ガチャッと音がして扉が開いた。ナリアは急いで部屋の中に入り、鍵をかける。部屋の奥にあるベッドには、イオルグがスースーと寝息を立てて眠っていた。

「よ、よし！」

ナリアは自分のローブ、着ている衣服や下着も全て脱いで、イオルグの布団の中にござごと侵入する。

「えっと…まずは勃たせる…だよね」

ナリアがイオルグのズボンに手をかけてゆっくりと下に降ろす。

「うわあ…え…と、これで…勃ってないの？」

ナリアが下着越しにイオルグのちんぽをふにふにと触る。そこはまだ固くなっていないにも関わらず、ナリアの予想を超える大きさだった。

「あ…えと、触って…えっと！」

ナリアは本で読んだ知識を総動員してなんとかイオルグを勃起させようとする。

「さ、触ればいいの…？えっと、えっと」

あんまり強く触ると痛いだろうかと思い、指でスリスリと軽く撫でてみると、

上の方からクスクスと笑い声が聞こえてきた。

「あ…」

そして勢いよく布団を剥がれ、ナリアの裸体が露になる。

「…はは、君か」

「あの…その…」

薬が効いているのかまだ分からないナリアが顔面蒼白になって震え出す。

「はは…おいで。何をそんなに怯えてるんだ？」

「ひゃっ♡」

蕩けるように笑ったイオルグが体を起こして、ナリアを向き合うようにして自分の膝に座らせる。

「…裸で俺の布団に入るなんて…エッチだなあ、君は」

「あ…」

イオルグの大きな手がスリスリ♡とナリアの頬を撫で、そこにキスをしてくる。

（良かった…。ちゃんと薬、効いてるみたい）

イオルグがまともに返事もしない自分にこんな碎けた表情を見せるはずがない。自分の魔法薬がちゃんと効いているのだと判断したナリアは、遠慮なくイオルグにぎゅうつと抱き着いた。

「イオルグ…大好き…、大好きなの」

「っ！これは…夢か？」

「っそ、そう、夢だよ。イオルグ、好きい」

「んむう」

ナリアがイオルグの口にむちゅう♡と唇を押し付ける。

「えへへ、チューしちゃった♡」

「ああ…くそ…、これは…ああ…」

イオルグは一瞬だけ目を見開いた後、手で顔を覆って何かを呟いている。きつと自分の好きな女性からキスされたと思って喜んでいるのだろう。少しだけ胸が痛いけれど、元から一度だけ抱いてもらう予定だったのだ。変な感傷に浸って、たった一度のチャンスを棒に振りたくない。

「イオルグ…もう一回、チューしていい？」

「…もちろん」

ナリアが目を潤ませて尋ねると、指の間から瞳を覗かせたイオルグが低く呻くように返事をした。ナリアはへにやつと笑って、イオルグの手をどかせると、またちうちう♡と拙いキスを繰り返し始める。

「好き♡好きなのイオルグ…ずっと…ずっと好き…♡ん…んう♡」

「はあ…♡んっ♡…んう♡…ふっ…♡ん♡」

イオルグはナリアの腰に手を回し、されるがままになっていた。それがまるで自分を受け入れ入れてくれているように感じたナリアは、どんどん気持ちがあふれ出てしまう。

「イオルグ…♡うう…イオルグ♡」

「ああ…イオルグだぞ？ちゃんという…泣かないでいい」

「ひっ…うう…好き…好きなの…」

「うん…俺も…大好きだ」

「うううっ！」

堪らなくなつたナリアがぎゅうつとイオルグの頭を抱きしめる。「むぐう！」といううめき声を上げて、イオルグの顔がナリアの豊満な胸に埋まった。

「嬉しい…、嬉しいよお、イオルグ♡好き、大好き♡」

「むぐう…んう♡」

「あ、ご、ごめんなさい」

イオルグの苦しそうな声を聞いて、ナリアが慌てて体を離す。

「はあ…天国かと思った」

「ご、ごめんね、苦しかったよね？」

真っ赤になったイオルグの頬をナリアが申し訳なさそうに撫でる。イオルグは「そうじゃないんだけど…、まあいいか」と呟いていた。

「…なあ、君が裸で来てくれたってことは、これ、使ってもいいってこと、だよな？」

「ひゃうッ♡」

イオルグがナリアの腰を掴み、グツッと下に押し付ける。するといつのまにか固くなっていたちんぽが下着越しにぐりい♡とむき出しのまんこに押し付けられる。

「あ…かた、い…？おっきい…」

「…俺が我慢強い元副騎士団長なことに感謝して欲しい」

「んうう♡」

イオルグがナリアをちんぽに押し付けたまま、ぐりぐり♡と左右に腰を揺らす。

「あうう♡ちょ、ま、待って！イオルグっ♡わ、私がしたいの！」

「…君がするの？」

「う、うん…！ダメ？」

「…ダメじゃないけど」

いつもニコニコと笑っているイオルグがなぜだから少し拗ねてるような気がして、ナリアは焦り始める。

（さ、さっさと入れて気持ちよくしないから怒ってるんだ！）

「す、すぐ入れるから！」

「…は？え、ちょ！」

「っんうう！」

素早く下着の中からイオルグのちんぽを取り出したナリアが、先っぽを自分のまんこに合わせて急いで腰を落とそうとする。

「んぎゅうう！」

メリメリと自分の膣が無理やり割り開かれる痛みに、ナリアの目に涙が滲む。

「こら！何してる！」

「あ…」

イオルグの大きな腕で体を抱き上げられ、そのままちんぽを引き抜かれたンナリアはボロボロと涙を流し始めた。

「や、やっぱり、ダメ？私じゃ…ダメ…ですか？」

「はあ……」

イオルグが大きなため息を吐いた後、ナリアにベッドの上に立つように指示した。

「あ……え？」

「……いきなり入れるから、赤く腫れてる。んう……」

「ひいあああ！な、何!? なになになに!!」

ちゅう♡ちゅう♡レロレロ……ちゅう……ちゅううう♡

「やだあああ……♡♡♡」

イオルグが大きな舌でナリアのまんこをレロレロ♡と舐め回し始めた。イオルグに奉仕することだけを考えていたナリアは、まさか自分が奉仕されるなど一ミリも考えておらず、顔を真っ赤にして狼狽える。

「ま、まつで……いおる……ぐつ、そ、そんなのしなくていいからっ……ひあっ♡あ、

まって、まって、舌でレロオって、やだ、ゾクゾクってする…変だから、ほんとに…っ！んやあああ~~~~ッ♡♡♡

「んう♡…赤くなって…んう…可哀そうに…ちゅう♡ちゅう♡…んう♡んう♡」
「やあだああ♡いおるぐ、だめ、やめて！汚い…いやだああ♡」

「…ちゃんと立つときなさい。大好きなイオルグの命令だ」

「っ…おねが…私が…いおるぐを…気持ちよく…して…！」

「…やらしー声でイオルグう♡って呼んでくれ。それだけで…はあ♡気持ちいいから」

ちゅううううう~~~~♡♡♡

「んあああ~~~~♡イオルグッ♡イオルグう♡ゆるして、ごめ、ごめんなひやいっ♡」

ちゅうううう♡ちゅうちゅう♡レロオ♡ちゅッ♡ちゅッ♡ちゅッ♡

「はううう~~~~ッ♡♡♡」

イオルグはナリアの悲鳴を聞いても動きを止めてくれない。それどころか、涎塗れの大きな舌をべえー♡と外に出して、恥ずかしがるナリアに見せつけてくる始末だ。

「ほら、これ。俺の舌…大きいから、レロォ♡ってすれば、まんこ全体舐められる。していい?」

「あ…う♡ふっ…♡ふッ…♡」

「期待してる目、やらしくてかぁいいな…♡いいよ、してあげる♡んう♡」
れろおおお♡

「んおおお~~~~ッ♡♡♡」

ぞりぞりぞり♡と舌でまんこを舐め上げられ、ナリアの足がガクガクと痙攣する。思わず内股になってしまいそうになるナリアの足を、イオルグの大き

な手がぐつと掴んで、それを止める。

「閉じたらダメだ。んう♡」

ぢゅうう♡ぢゅるる♡ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡

「ほおお♡おッ♡おッ♡おっ♡まっで！まっれ、きぢゅい、いおるぐ、これ、きぢゅしゅぎるから♡」

「気持ち良すぎるんだな？…でもこれから慣れていかないと大変だぞ？」

ニヤリと笑ったイオルグが、ナリアのピヨコンと立ち上がったクリトリスを前歯でぷちゅう♡と甘噛みした。

「あえ♡♡」

ぷしやああ♡♡♡

ひくん♡と背を逸らしたナリアのまんこから、透明な潮が吹き出しイオルグの顔と身体をびしょびしょに濡らす。

「…すっごいな」

「あ…ごめ、な、さい…ほんとに…ごめ…なさい」

目を見開き真っ青になったナリアが、何か拭くものを探すが、服も着ていないし、イオルグの布団を使う訳にもいかない。

「ごめ、ごめんひゃい、ゆるひて」

そう言いながら、ナリアが舌でぺろぺろ♡とイオルグの顔を舐めた。

「…」

「ごめ、んう…ごめ…なひゃい…こんな…汚くして…ぐすっ…こんな、筈じゃ…ただ、私は…イオルグに…処女を貰って欲しかっただけで…こんな、汚すつもりなんて…」

「処女なのか？」

イオルグがナリアの両頬に手を当てて、上を向かせる。涙でぐちゃぐちゃに

なった顔でナリアは何度も頷いた。

「言葉でちゃんと教えてくれ。処女なんだな？…まだ誰にも、ここ、触らせたこと、ないんだな？」

「っあ♡うう♡んう♡ふっ♡ふっ♡」

イオルグの指がカリッカリッ♡とナリアのクリを引っ搔くせいで、まともに返事ができないナリアに、イオルグが目を細める。

「答えるんだ」

「ひううっ♡処女です♡まだ、誰とも、こんなことしたことないよお♡」

「そうか…」

「つつふ…え…いおるぐう」

「ん？どうした？」

今までも優しい雰囲気だったのに、さらに甘い口調で返事をしてくれるイオ

ルグに、ナリアまで頭がドロドロに蕩けてしまいそうだった。

「おねがぁい、エッチして？一回でいいからぁ♡」

「んゝ？ならダメだ」

「なんで…なんでえ！」

ナリアが絶望した顔で、イオルグの胸をぽかぽかと叩く。

「一回ぐらい…いいでしょう！一回してくれたら、もう関わらないからぁ！」
興奮したナリアは、イオルグが自分を「好きな人」に見えていることを忘れ、自分の気持ちを溢れさせてしまう。

「今日しかないの！今日が終われば…イオルグは、王都に帰っちゃう…！もう…話すこともできなくなっちゃう…！」

「…」

イオルグは黙ってナリアの全くダメージのない攻撃を受け続ける。

「お願い……お願いします、今夜だけ……私に……情けをかけて……くださいい！」

ナリアが涙目でイオルグを見る。その緑の瞳は、一切ぶれずにナリアの顔に向けられている。やはり何も言ってくれないイオルグに、ナリアはとうとう強硬手段に出ることにした。

「も、もういい！イオルグがしてくれないなら勝手にする！」

「勝手にするの？」

「する！も、もう自分で、でき…るっ！」

「…そう、ちんぽを掴んで…っ、まんこに当てて…はあ…♡、ゆっくり、腰を下ろす…っ♡そう、ゆっくり、上手…上手だよ」

ふちゆゝぬふふふふ
 〵〵〵〵〵ツ
 ぱちゅんツ♡♡

「い あ あ あ ツ ♡ ♡ ん う う う ♡ ふー ツ ♡ ふー ツ ♡」

「はあ…♡全部入ると、君の、子宮口、ぶちゅう♡って潰しちゃうから。」

腰は、俺が支えとく。…浅いところ、好きにぱちゅぱちゅ♡ってしてもいいよ♡」

「つい、言われなくても、す、するから！」

「うん…。して?♡」

「あつ…んう♡ふぁ♡あ♡あ♡ん♡んうう♡」

ぱちゅ♡♡ぱちゅ♡♡ぱちゅ♡♡ぱちゅ♡♡ぱちゅ♡♡ぱちゅ♡♡

ナリアが横になっているイオルグの上に乗る、ベッドで足を踏ん張りながら、
へこへこ♡と腰を振る。

「ひぁぁあん♡なんでえ…初めて…初めてなのに、きもちい♡しゅご、イオルグ、しゅごいのお♡」

「目、つぶったらダメだ。俺を見て。ずーつと俺を見とくんのだ」

「あ♡あ♡あ♡あ♡」

「お目目、チカチカしてる?はは、やあらしいの♡ほんと俺が動いて、君の

お腹がぐちゃぐちゃ♡って啼きまくるまでガン突きしてあげたいけど、今日は、自分でしたいんだよね？いいよお、君の言うことだけは聞いてあげる♡俺、いい子だからさ♡んう♡はあ、そこ、そう、先端、まんこの入り口でちゅぽちゅぽ♡ってするの、腰、溶けそう…♡ああ、もう俺が気持ちくなること、覚えたのか？」

「んう♡ん♡いおるぐ…きもちくなつてえ…忘れるけど…このエッチ、忘れちゃうけど…忘れないでえ♡」

「…忘れる訳ねーだろうがっ！」

ぽちゅんッッッ♡♡♡♡

「ほんつとに調子に乗りやがって！誰が！忘れるってえ！こんな！やらしーこと！俺が！忘れると！思ってたのかあ！」

ぽちゅんッ♡ぽちゅんッ♡ぽちゅんッ♡ぽちゅんッ♡ぽちゅんッ♡

「いぎい♡あう♡うゝゝゝ♡うゝゝ♡まっで、奥、やだああ♡わたしの、すきなように、していいってっ！いっただあ！」

「前言撤回だよ、そんなの！この、やらしいお間抜け魔女が！」

ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡

「あゝゝゝ♡あゝゝゝ♡イオルグ、いくう♡いっぢやう♡ちゅーして、チユーしながらイキたい♡」

「くそお、可愛い…！可愛い可愛い可愛い！チューなんていくらでもしてやるよ！ん♡」

「んうう♡」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅ♡

ぶびゅうううゝゝゝ♡びゆるるる♡ぶびゅ…ぶびゅ♡

「んゝゝゝゝ♡」

キスハメしながら、中に熱々のドロドロザーメンをひり出され、ナリアが目を見開き絶頂する。ナリアの体を拘束するように強く抱きしめ続け、射精しながらもグリグリ♡と腰を押し付けてきたイオルグが、やっとぬぽ♡と音を立てて舌を引き抜く。

「はぁ♡はぁ…ナリ…」

「はぁ…っえい！」

「あ？」

息も絶え絶えのナリアがイオルグの額を指でペチンと叩く。すると物騒な声を出して、そのままイオルグが後ろに倒れ込んだ。

「はぁ♡はぁ♡…後は、お風呂入って、お洋服、綺麗にして…」

魔法でイオルグを気絶させたナリアは、こぼ♡と音を立てて自分のまんこから溢れ出てくる精液を真っ赤な顔をして手で抑えながら、いそいそとお風呂

へ向かったのだった。

「みんな、クエストお疲れ様だったな。王都に帰ろう」

「ふふ♡イオルグ♡王都に帰ったデートしてくれる約束よね？」

「何を言う！イオルグは我と竜族の里に行く予定なんだぞ！」

「イオルグ、一緒に武器を見に行ってくれるという話はどくなったんだ？」

「…」

翌日、相変わらずイオルグは美人3人に囲まれ、笑顔を浮かべている。その後ろで、ナリアは誰にもばれないようにローブの下で自分の腹をスリスリと撫でた。もちろん、避妊薬を飲んでるので妊娠はしない。それでも、大好きなイオルグの種を胎に注がれたことが何よりも嬉しかった。

（イオルグとエッチできたこと、死ぬまで糧にして生きて行こう）

そう思いながらロープに隠れた顔を綻ばせていると、後ろから「おい！」と誰かを呼ぶ声が聞こえてきた。ナリアが振り返ると、一人の青年が必死の形相で走ってきている。

「そのロープの人！待って！待ってくれ！」

「あ、わ、私ですか!？」

ナリアが立ち止まると、青年はほっとしたような表情で、少しだけ速度を緩めてナリアの傍で止まった。

「あんた、昨日うちの母ちゃんの店で買い物した人だろ？」

「あ、もしかしてニシフの粉を買った…」

「そうそう！あんたにどうしてもお礼がしたいって母ちゃんから頼まれたんだ。…あんたがくれた石のおかげで、母ちゃんにずっと迫ってた金持ちのクソジジイが店に来なくなったんだ！ほんとにありがとう！」

「そ、そうだったんですか！大したことない物でしたが、役に立ってよかった！」
ナリアがローブを脱ぎ、青年を見上げてにっこりと笑う。すると男がぽかんと口を開けた後、その顔が真っ赤に染まった。

「あ、あの！そ、それで！これ、母ちゃんから、まだ残ってたからって！」

「わ！わあああ！イオルグ君人形の夜会着バージョン！髪飾り付き！こ、こんな貴重な物、いただいていいんですか!？」

「妹ももういらなくなって言ってたからいいんだよ。そ、それより、あの、またこの街に来る…？良かったら来た時に食事でも…」

「ナリア？その方は？」

「イオルグ！えっと、その…この人は、ちよつと知り合いというか」

店で大変貴重なニンフの粉を買ったことが知られれば、余計な詮索をされるかもしれないと思い、ナリアが口ごもる。

「俺は、母ちゃんがこの子に世話になったからそのお札を渡しに来たんだ!…
ちよ、待ってくれ!あ、あなたイオルグさん!」

「…たくさんの人に知ってもらえてありがたいな」

「うわあ!すげええ!超有名人に会えるなんて!なあ、この街に来たら、また
絶対うちに寄ってくれ!じゃあな!」

青年がニコニコ笑顔で去っていく。イオルグは青年にひらひらと手を振った
後、冷や汗をかくナリアを見てにっこりと笑った。

「…イオルグ君人形より、俺が夜会着を着てるとこ見たくないの?」

「み、みたい!」

ナリアは思わず口に出してしまい、慌てて自分の口を塞ぐ。それを見て、イ
オルグはクスクスと笑っていたが、遠くから美人3人に名前を呼ばれ「今行く
よ」と駆けて行ってしまった。

（やっぱり好き…。もっと…仲良くなりたいたいよ）

イオルグの大きな背中を、ナリアが眩しそうに見つめる。結局、昨晚、イオルグに自分が誰に見えるのか聞けなかった。あれだけの甘い対応をする女性なのだ、きつと可愛くて優しくて優秀な人なんだろう。

「頑張ろう…頑張って、イオルグに少しでも振り向いてもらえるように！」
ナリアは拳を握りしめたのだった。

「…あの人形、ほんとムカつくな」